

I 研究の経過と概要

1. 21世紀に求められるもの

近年になって、児童生徒をめぐる様々な問題が顕在化してきた。児童虐待・キレル子供・学級崩壊などである。これは子ども自身の問題ではなく、家庭・学校・社会いわゆる大人社会の問題であると心理学者などが指摘している。車の中に子どもを置いたままパチンコをしている親、子ども側の視点でじっくり向かい合う余裕のない生活、塾や習い事のため日が暮れるまで遊びほうけるという経験のない子ども、空き地が減ってのびのびと遊べる場が少なくなっている状況と、あげればきりが無いほど子どもたちの生活は孤独で窮屈になってきている。こうした様々な背景が複合的に重なり合っただけで子どもたちの問題行動が噴出してきただけと思われる。学校現場でも、低学年では教室を歩き回る子どもが目立つようになり、高学年になれば無気力な子どもが増えてきているといわれる。指示されれば与えられたことはするがそれ以上のことはしようとはしない。失敗しないかわり積極性も見られないという。そして何年か前によく言われた「無気力・無関心・無責任」どころか、ときには自分自身の心のイライラを解消するため他人を傷つけることまでしてしまう生徒が明らかに増えはじめてきている。

科学技術の発達により生活はどんどん便利になった。その反面、欲求を叶えるまで我慢したり努力したりする意志が希薄になってきたように思う。また、忙しきにかまけ生活は皮相的なまま流れてしまい、じっくりと心を通わせ人の悩みや喜びを分かち合う時間もなくなってきているのも事実である。20世紀は、例えば日本では高度経済成長を遂げて物やお金の価値を優先し、生産と消費をどんどん繰り返していく経済活動が人間の幸福や豊かさにつながっていくと考えてきた。しかしどこかで人の心を大事にするという意識が忘れられていたのだろうか。そのために、一番弱い何も知らない子どもたちがその犠牲となっているような気がする。

このような時代だからこそ、文部省は「こころの教育」を唱え、週休2日制により家族でもっとふれ合う機会を増やすよう呼びかけている。「新しい学力観」においても、教科学習による知識の詰め込みよりも自ら学習しようとする意欲を重視した見解を提示している。そうした精神的な面における力を「生きる力」と捉えた点が今後の教育に重要な意味をもつと考えられる。

暮らしを支えるものは物やお金だけでなく、「こころ」も大切な価値ある要素である。互いの「こころ」を育てるといふ営みを大切にして家庭・学校・社会の中に広め深めていくことが今後の課題であろう。すなわち、21世紀は人間が本来の人間らしさを取り戻す生活をするのが求められているのではないだろうか。地球が、子どもが、弱者が切り捨てられるような社会ではなく、周りの環境に優しく接し大人も子どもも障害者も健常者もゆとりを持って共に生きることが今後さらに重要になってくると思うのである。

2. 豊かな心と生活をめざして

人間らしさを取り戻す生活といっても、何も昔の生活にもどろうというのではない。科学による文明の進歩は、言うまでもなく私たちの生活をより豊かに変えてくれたし、これからもその発達の恩恵を受けることは明らかである。ただそのために豊かな自然や純粋無垢な子どもたちが犠牲になっているというのでは本末転倒である。そこで、強調したいのは人と人との自然な触れ合いのある暮らし、無駄なことを全て排除するのではなく、その無駄も心の余裕に十分必要なことであるという意識、ゆとりがあって笑いのある楽しい生活、自分を偽るのではなく自分らしくそしてそれを互いに認め合うというそんな普通の生活に身をゆだねようとする気持ちが大切であるということである。

私たちが接している知的障害の子らは人を陥れたりいじめたりはしない。天真爛漫なそのしぐさは時にホッと心をなごませてくれ、頑固な面やこだわりのある行動もその暮らしの現れとして受け入れることができる。大人になると忘れてしまう純粋さを障害を持った子どもたちは思い出させてくれるのだ。そして彼らと接することで私たちの心も豊かになることを感じるのである。とかく障害者というと社会に対しては受け身であり、それが当たり前とされてきた。かつては行政側でも社会の枠に適應できるように障害者を教育・訓練しようという考え方が主流であった。しかしノーマライゼーションが社会に浸透するにつれ、障害者自身が発信し自ら行動を起こすことが尊重されるようになり、地域社会でもそれに合わせた取り組みがなされるようになってきた。障害者のQ・O・Lの向上やバリアフリー化が盛んに叫ばれているのもこうした流れによるものである。

本校でも社会に自立・適應できる子供の育成を教育目標にしている時代があった。しかし、昭和50年頃から障害の重度化・多様化の傾向が強まり、このような目標で子どもたちを指導していくことが難しくなってきたことから、子どもたちのあるがままの姿を受けとめ、そこからどんなアプローチが必要かを考えるようになってきた。そして昭和62年度編成の教育課程において「全面的な発達をうながし、その子らしくのびのびと生きる」ことを目標にして、子ども達の個性を尊重し自己決定や自己実現をめざす教育の推進に努めるようになったのである。つまり教師側からの一方的なアプローチではなく、子ども自身の姿に寄り添いながら、その子どもの持っている力や可能性を十分に判断し活かし伸ばす教育を試みたわけである。

こうした取り組みは前にも述べたように、人間本来の豊かな生活とは何かを考えさせてくれるものである。人から「ああしろこうしろ」と言われて動くのではなく、自分が本当にしたいことを思う存分やって心から満足する。そして人とかかわりの中でお互いを認め合い人と共に生きていくこと。当たり前のことであるが人間性を取り戻す教育には大切なことである。人や自然などを慈しみ、それをかけがえのないものとして大切にすること、そして一人一人の子どもたちの伸びようとする力を支え見守ることこそ、私たちの使命ではないかと考える。そのために私たちはできる限りの条件を準備する必要がある。

比較的柔軟に教育課程を編成できる養護学校においては、子どもたちの心の成長を大切に一人一人の個性を尊重した指導をしていくことができる。「こころ」の発達を中心

に据え、その成長に合わせた子どもたちの「心の豊かさ」「生活の豊かさ」をどのように追及していけばよいのか、そしてそれに応じた実際の生活のあり方はどうあればよいのかを考えていくことが重要な研究課題となっている。こうしたことから、私たちは平成5年度より「豊かな心と生活をめざして」というテーマを掲げ研究活動を始めたのである。

3. 「豊かな心と生活」についての基本的な考え方

私たちは、平成8年度の研究において子どもが豊かに成長していく過程を次のような構造図で表した。

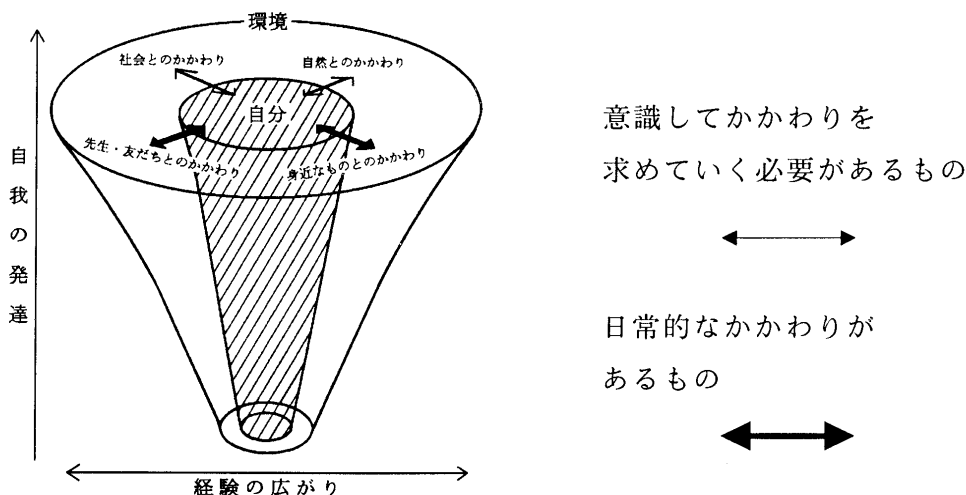


図 I - 1 豊かな心と生活の構造図

人は家庭・学校・社会・自然などの環境の中で生活し、さまざまなことからを経験している。小さい頃は自己中心的で周りの環境への働きかけも身近なものだけにとどまる。だが成長していくにつれて、ものや人とのかかわりを楽しみ、相手を意識し自分自身を見つけていくことができるようになっていく。自分の周りには多くの環境が在ることを知り、さらに、それらとかわり自分の中に取り込むことによって、経験が広がり自我の成長とともに自分自身がより豊かな存在となっていく。こうした考えは多くの人たちが理論化している。

現京都ノートルダム女子大学長 梶田叡一氏は「自己意識の心理学」において次のように述べている。

人は生きている限り、環境との間に不断の相互作用を持つ。これは必要な物質や情報を周囲から取り入れることによって自らの存在と機能を維持し、環境の諸条件に適合するよう自らを調節し、さらに強いもの、より一貫したもの、より活動領域の広いものへと自らの発展をはかるといった一個の生命体としての人の基本的活動である。つまり人は、環境との相互作用を通じて、絶えず環境の一部を自らの中に取り入れ、環境への適応につとめ、自立した生命体としての強化発展をはかっているのである。このような相互作用は意識や予測、判断などを伴いながら意図的に行われる。このときの自己意識がさまざまな意味での準拠枠として機能するのである。

また、ビジネス分野における思想家、スティーブン・コヴィー氏は著書である「7つの習慣」の中で次のように説明している。

人は皆依存しきった赤ん坊として人生を始める。そして他者によって方向づけられ育成され養われる。年月が経つにつれて人は徐々に肉体的に、経済的に、知的に、そして精神的に自立していくことになる。自分のことは自分でやり、自己決定できる独立した人間になっていくのだ。さらに成長と成熟を続けると、自然界すべての要素は相互依存関係にあるということを意識するようになる。つまり自然界や私たちの社会すべては生態的なシステムで成り立っていることに目覚めるのである。そして自分の本質のもっとも崇高な部分は周りの人との関係にかかわるものであり、人間の生活そのものも相互に依存し合っていることが分かるようになる。

梶田氏は、環境との相互作用は意図的な自己意識によってなされ、これによって生命を維持し自分を意味づけ自己を高めていくと述べている。一方、コヴィー氏は、相互に依存し合っていることで人間の生活が成り立っていることを強調している。これらのことはストレートに教育にも当てはまることであろう。こうしたことは私たちも含めて一般の人たちの成長発達に関することであるが、障害をもった子ども達についても同じ事が言え、人間の豊かな営みにおける原則は、普遍的なものであると改めて考えさせられる。

「教育とは様々な経験の中での人とのかかわり合いである」と言われる。もう少し詳しく言えば、普段できない経験の場が保障され、集団生活の中で知識・技能の習得や人とのかかわり方、生活の仕方などを学ぶということであろう。考えてみれば、私たちはこれまで一体何人の人たちの世話になりその影響を受けてきたであろうか。その人たちとの出会いが今の自分自身を形づくっているとんでも過言ではない。そして同時に数え切れないほどの経験の場にも立たされてきた。その一つ一つが自信となり生きがいとなって今の自分を支えている。つまり他者や社会との調和を保ちそれに支えられながら自己を創り上げる。そして一つのことをじっくり追い求めたり、いろいろなことに挑戦したりして自分らしい生き方を身につけさらに周りから認められる。このことこそ、その子にとって豊かな生活であると言えるのではないだろうか。

このように、人やあるいは物や経験の場いわゆる自分を取り巻く環境が人間の成長に大きく関与しているということを前提にすれば、子どもたちにどんなより良い環境をどのように与えるべきかを考えることが大切になってくる。

ところで、私たちはこれまでの研究において「豊かな心と生活」を次のように捉えて、実践を積み重ねてきた。

豊かな心と生活とは、「さまざまな場面でものや人とかかわり合うとともに、自分らしさを発揮しながらのびのびと生きること」

ここで言う「さまざまな場面での人やものとのかかわり」とは、遊びの場面、学習場面などにおいて子どもたちがいろいろな対象に働きかけ、それらに対する認識を深めるとともに、自らの精神世界を広げていくことを意味している。また「自分らしさを発揮して」とは、人やものとかかわることで形成された自己を個性として発揮し、自発的・創造的に行動し喜びに満ちた質の高い生活を送ることを意味している。

子どもたちの生活が今現在豊かであり、将来社会に出ても豊かであり続けるためには、対象に働きかける力、コミュニケーションする力、自分を表現する力、他者と協同し共感できる力などが求められるだろう。そのためにも、学校教育の中で十分なかかわり合いや自分を発揮できる場を用意していく必要があるだろう。

このような基本的考えに立って考えると、小学部から中学部、高等部の豊かな心や豊かな生活は次のように系統立てることができる

- ・小学部（大人に依存する中で自分づくりの基礎を固める時期）
情緒の安定、生活のリズム、基本的な生活習慣の定着、いろいろな動きづくり
大人に依存しながらできることを増やす、周りの人たちと一緒に行動する
大人とのかかわりを楽しむ、友達を意識する、身近な環境に働きかける
- ・中学部（依存から自立へと移行し、自分をつくりあげる時期）
体づくりの充実期、知識や技能を生活に活かす、自分を理解する、
自分を表現する、友達とつながり合う・かかわり合う
- ・高等部（周りの人たちと協調・協同し合う中で、自己決定や社会参加する時期）
余暇の過ごし方を身につける、社会とのかかわりの中で生きる
自ら判断し自己決定する、自分の良さを積極的に生活に活かす
友達と協力し合い責任を果たす

これらの共通しているもの、一貫しているものを考えると次のような事柄があげられる

- ・人、もの、自然、社会とかかわり合う
- ・自分自身を知り、自分の良さを発揮しながら活動する
- ・学んだ基礎的な知識技能を生活の場で活かす
- ・積極的に学習したり運動したりできる健康な心と体をつくる

この4点は「豊かな心と生活」をめざす教育を推進するために必要な指針として、教育課程を編成する上でも常に念頭に置いておかなければならないことと考える。

4. 「豊かな心と生活」をめざすための取り組み

平成5年度からの研究活動において「豊かな心と生活」をめざす取り組みを行う中で、各学部で様々な指導内容が考え出された。小学部の「ランランタイム」中学部の「散歩学習」「フリーデイ」高等部での「ほんもの学習」である。これらは学部全体で取り組むも

のや、クラスごとに活動するものなど様々であるが、「子どもたち同士のかかわり合い」や「自ら考え自ら決める主体的活動」を目的としたもので子どもたちも実際大変楽しみにしている学習である。

本校では従来より学級集団を基礎として、縦割りグループ、学部集団、全校集団と様々な学習集団を編成した教育を「集団学習」と称して行っている。これはそれぞれの学部の実情や指導の形態に対応して行われてきたもので、特に大きな集団の中でダイナミックに活動することが情緒の安定や社会性を養う上で大変効果的であるとの研究成果により、昭和62年度編成の教育課程（P8構造図参照）に位置づけられたものである。この「集団学習」の中には、昭和52年頃より行われていた小学部の「部朝の会」、平成元年度より位置づけられた中学部の「ハッピータイム」、そして集団の形態は違うが昭和56年頃から部全体の取り組みとして行われている高等部の「挑戦学習」、さらに「全校集会」や中学部と高等部合同で行っている「鼓笛隊」などがある。このような指導内容が1日の中に組み込まれることによって変化に富んだ時間割となり、子どもたちが気分転換しながら学習に集中できることも大きなメリットである。

「ランランタイム」「散歩学習」「ほんもの学習」はこの「集団学習」の良さを取り入れたもので、様々なねらいを達成できる総合的な活動として考え出されたものである。また、これらの活動はそれぞれの学部の子どもたちの実態に応じて考えられたものばかりであり、小学部では1日のリズムや「見る・まねる・おこなう」といった一連の活動の定着をはかるものであるし、中学部では友達とのかかわり合いや自己表現をねらったものとなっている。高等部では余暇の利用については卒業後の生活につながるものとして取り組まれているものである。

なお、下の表はそれぞれの集団学習が始まった年代を表すものである。

表I-1 本校における集団学習

	小学部	中学部	高等部	全体・中高
昭和50年代	「部朝の会」		「挑戦学習」	「全校集会」「鼓笛隊」
平成元年	↓	「ハッピータイム」	↓	↓
6年		↓	「レクリエーション学習」	
7年		「散歩学習」	↓	
8年	↓	↓	「ほんもの学習」	
10年	「ランランタイム」		↓	
11年	↓	「フリーデイ」	↓	
	↓	↓	↓	↓

5. 教育課程づくりに向けて

(1) 教育課程の役割

教育課程とは、学校教育の目標を達成するために、教育内容を児童生徒の心身の発達に応じ、授業時数との関連において総合的に配列した指導の計画である。また、教育の内容を具体的に示し、担当の教師が替わっても、大幅に内容を変えることなく児童生徒の能力

や発達に応じて、適切な指導が施されるよう標準化された手引きとしての役割ももっている。

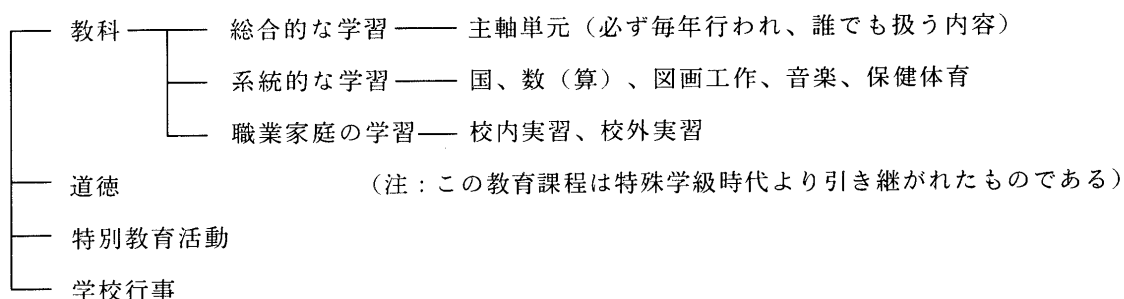
さらに、地域性や児童生徒の実態により、その内容は他校とは違ったものになるし、それぞれの年代の障害児教育に対する考え方の変遷にも左右される。

つまり、教育課程は学校で一つの目標を立て、それに向かって小中校一貫した教育を施すため、その教育内容を構造化したり具体化したものであり、いわば学校という船がある指針にしたがって方向を間違えずに舵取りしながら進む羅針盤のようなものと言えよう。

(2) 本校の教育課程の変遷

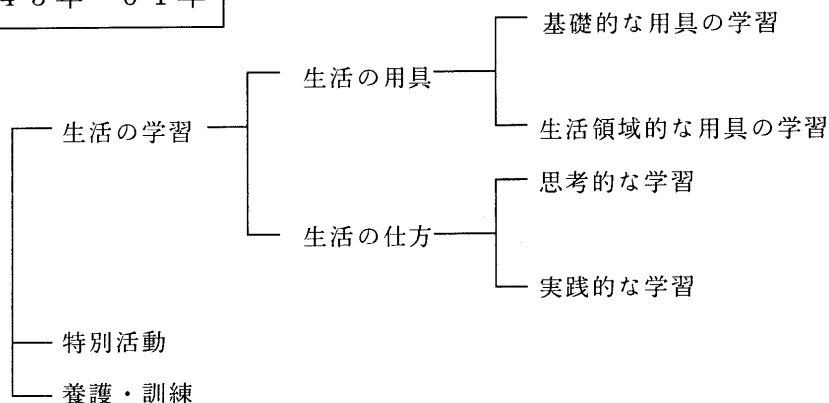
本校は、昭和39年に附属小中学校特殊学級から附属養護学校として独立して以来、3回の教育課程改訂を行っている。現行の教育課程を見直し整理する意味で過去の教育課程の変遷を簡単に振り返ってみることにする。

昭和38年～42年



この時代に「総合的な学習」という名称がすでに本校において使用されていたことに驚かされるが、この「総合的な学習」は今回の学習指導要領に打ちだされたものとは違い、日常生活と直接つながるような時点に位置する、いわゆる季節や行事などを単元として構成する生活単元学習的な色彩の濃いものである。これに対して国語や算数・数学などは、生活経験を中心とする学習だけでは十分な力を身につけることが難しいので総合的な学習から切り離し、「系統的な学習」として基礎的な知識・技能が習得できるようにした。

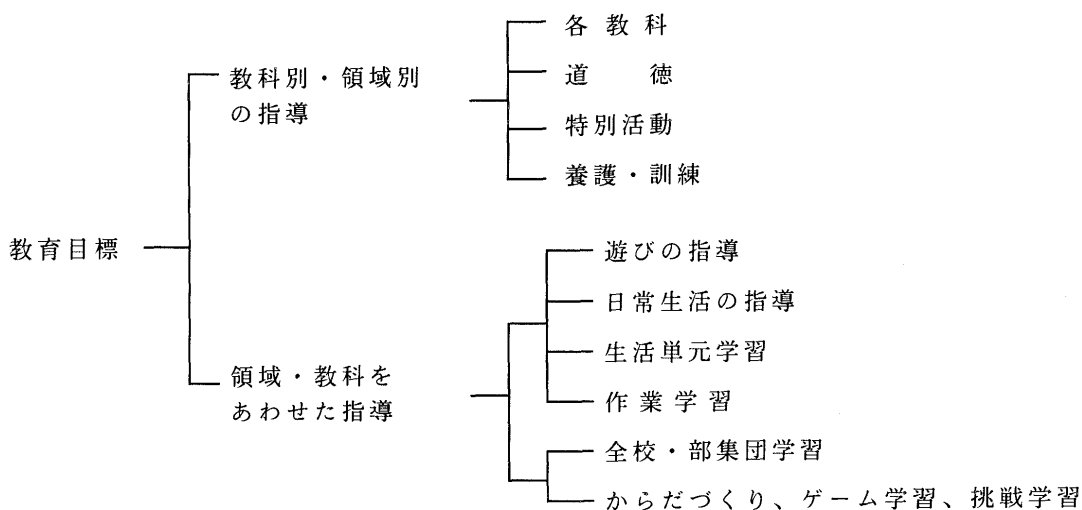
昭和43年～61年



昭和46年に学習指導要領が改訂され、教科に生活科、領域に養護・訓練が加わったことにより、いっそう一人一人に応じた教育が求められるようになった。これまでの教育目

標は「職を得て社会に自立すること」であったが、知的に遅れた子どもたちとはいえ多種多様な興味関心を持つ子どもたちに対して、もっと積極的に能力や才能の全面的・調和的な発達を促進させる」という考え方をもつようになった。そこで、「生活の用具・生活の仕方」という全く新しい概念構造をもつ教育課程を編成した。これは生活単元を教材型の学習と実践的な行動の学習に分けた教育課程である。「生活の用具」は教科の体系を重んじながら必要な知識技能を教師が主導的な立場に立って進めるものであり、「生活の仕方」の学習は子どもの生活の体系を重んじながら、子どもたち自ら集団の一員としての役割を自覚し、生活する上での諸問題を解決していく能力を養うものである。

昭和62年～平成9年



「生活の用具・仕方」の教育課程は児童生徒に働きかけうるすべての内容を網羅し集大成したものであったが、「用具」「仕方」という呼び方がなじみにくいということもさることながら、教科的内容が「生活の学習」の中に位置づけられているため、実際には「仕方の学習」と区別が付きにくいということが指摘された。そこでやはり教科は教科として独自のねらいをもって表すべきであるという考えのもと全国で共通となっている構造にもどすということ、そしてこれまで本校の特色として実践されてきた「集団学習」を教育課程の中に位置づけるため昭和62年に現在の教育課程が編成された。

年代によって名称こそ違え、「系統的な学習」や「生活の用具の学習」はすなわち教科学習のことであり、「総合的な学習」「生活の仕方の学習」「教科・領域を合わせた指導」は教科学習その他で獲得した力を生活実践の場で発揮し応用する学習と考えられる。

このことから、本校では教育課程の中で教育内容を「教科的なもの」と「生活的なもの」に大別してきたことがわかる。「生活的なもの」とは実際の生活の中で実行していく生活そのものに根ざした学習であり、生活単元学習など領域・教科を合わせた指導に位置づけられているものである。この「生活的なもの」にはいろいろな指導の形態があり、それを教育課程上に位置づけるにあたっては十分な検討がなされなければならない。

(3) 教育課程再編の背景

子どもたちが豊かな心をもち豊かな生活を送れるようになるためには、学校自体が豊かでなくてはならない。学校自体が豊かと言うことは、もちろん敷地がゆったりと広く施設・設備も十分整っていることと考えるが、それだけではなく私たち教師自体が子供に対し豊かな存在であること、学校以外の環境の活用、教材教具の開発と学校研究、学校と家庭が緊密な連携を行っていることなどハード面だけでなくソフト面での充実も大切である。

そのハード面とソフト面の両方に関連する教育体制づくりの一つに教育課程の編成がある。私たちは昭和62年度の教育課程において時代のニーズに対応した教育目標を掲げ、10年あまり取り組んできた。その途中平成5年に創立30周年記念の年を迎え翌年から「豊かな心と生活をめざして」というテーマで研究を始めた。豊かさを「様々な場面での、人やものとのかかわりを通してのびのびと生きること」と捉え、その指導の形態や指導内容・指導方法を検討し実践してきた。その結果、小中高の各学部で「ランランタイム」「散歩学習」「ほんもの学習」などいろいろな活動が考え出され今日に至っている。しかし、これらの指導内容が時間割に組み入れられてからは、従来の教育課程では間に合わなくなってきて、いろいろ検討すべき問題が生じ始めている。また、その位置づけも曖昧なままである。

そこで、昨年度からこれまでの取り組みについて見直すとともに、各学部の教育内容を整理し新たな教育課程づくりに取りかかった。昨年、小学部は「からだづくり」を取り上げて日常生活の基盤となる様々な「うごきづくり」を学校生活の中に取り入れていくことの必要性を確認し合った。中学部では「フリーデイ」というユニークな試みを通して中学部教育をとらえ直そうとした。高等部では「挑戦学習」を教科学習に位置づけて、教育課程の検討に取り組み始めた。ちょうど、文部省からは平成14年度に始まる学校週五日制完全実施に向けて学習指導要領が改訂され、「自立活動」の名称変更、「総合的な学習の時間」などの新しい分野も明記された。今後これらの目標・内容の理解と、実施に向けての研究を行うとともに、本校の教育内容との関連についても検討を加えなければならない。

このように、問題は山積しており、21世紀に向けての障害児教育をめざして本校の教育をさらに充実したものにしていかなければならない。そのためにも一層教育課程の再編に向けた研究が急がれるところである。

6. 今年度の研究の概要

(1) 研究の目的

- ①「豊かな心と生活をめざして」の研究で実践してきた新たな指導内容を教育課程の中に位置づける
- ②「豊かな心と生活」という視点で、各学部の教育目標を見直し、内容との関連やその構造を明らかにする。
- ③それに伴い、今までの教育課程を見直し、学校週五日制完全実施に向けて教育内容の整理・精選をはかる。

(2) 研究の方法

- ・ P 5 の「豊かな心と生活」をめざすための 4 つの視点を参考に、各学部の教育で大切にしたいことを話し合う。その中から学部の目標を決める。
- ・ 同時に学部の教育課程の大枠をはっきりさせていく。
- ・ これまでの教育内容を見直し、新たな内容との関連をはかりながら整理する。
- ・ 研究部は、各部の取り組みが全体とのつながりや一貫性・系統性のもとで進行するよう調整をはかる。
- ・ 以上の事柄を実行していくため各部の研究推進係を中心とした会を定期的に行う。
- ・ 必要に応じて、副校長、教頭、部主事を交えた拡大研究会を行う。

(3) 研究の内容

- ・ 本校教育課程の構造および指導内容を整理したものを表 I - 2 に示した。
これは、現在の教育課程に新たな教育活動を加えた形で掲載したもので、「総合的な学習の時間」「自立活動」については来年度に全校で検討することにした。
- ・ なお、「集団学習」については、全校・学部単位での集会活動、行事などに向けての生活単元学習としての活動、その他の総合的な活動などが実践されている。
したがって、指導内容や指導形態の中に複数重複して示してある。
- ・ 各学部の指導内容の中から、現在再検討すべき事柄を話し合い、下記の通り研究を行うことにする。

小学部	「生活」「音楽」「図画工作」の指導目標を教育課程の再編成という視点で再検討する。
中学部	中学部の目標やこれまでの実践について再検討を加え、教育課程の大枠をつくる。
高等部	高等部での指導内容を「学ぶ」「働く」「遊ぶ」の 3 つのカテゴリーに分類し、今年度は作業学習を中心とした「働く」を研究の対象にする。

(4) 各学部の研究の概要

①小学部

小学部では今年度、教科の中の「生活（基本的生活習慣の分野は除く）」「音楽」「図画工作」について学級（1組－低学年、2組－中学年、3組－高学年）としての指導目標を教育課程の再編成という視点から再検討することにした。指導目標の設定において本校小学部として再確認をしておく必要があると考えたことは低・中・高学年における指導目標の在り方ということである。目標の在り方について①低・中・高学年間に系統性（つながり）をもたせること、②個人の実態を踏まえること、の 2 つの視点を再確認した。この 2 つの視点をもとに、実践的試行を行う中で指導の目標や内容について話し合いを重ねてきた。その結果、各学級（低・中・高学年）間で知識・技能の習得や経験の積み重ねという観点から目標や内容を照らしあわせてみると生活年齢（学年）による違いが確認された。見方を変えると学習内容や活動に適切な時期があると言える。以上のような話し合いを経

表 I - 2 本校教育課程の構造について

一般的	本 校		
各教科	(小学部) 生活 国語 算数 音楽 図画工作 体育	(中学部) 生活 国語 数学 音楽 美術 体育 職業・家庭	(高等部) 国語 数学 音楽 美術 保健・体育 職業 家庭 挑戦学習
自立活動	コミュニケーション 言語 運動	コミュニケーション 言語 運動	コミュニケーション 言語 運動
特別活動	全校集会 学校・学部行事 週番活動	全校集会 学校・学部行事 生徒会活動	全校集会 学校・学部行事 生徒会活動
道徳	(道徳は学校教育全般に渡って行うものとする)		
日常生活の指導 遊びの指導 生活単元学習 作業学習	日常生活の指導 生単・ランランタイム 集団学習 (ランランタイム)	日常生活の指導 生単・ハッピータイム 集団学習 (ハッピータイム) (鼓笛隊)	日常生活の指導 レクリエーション学習 生単・ほんもの学習 作業学習 集団学習 (ほんもの学習) (鼓笛隊)

・ 中学部では毎学期1～2回ずつ「フリーデー」の日を設定する

て本校小学部における「生活（基本的な生活習慣の分野は除く）」「音楽」「図画工作」についてそれぞれの学級（低・中・高学年）ごとに大切にしたい目標が設定された。

② 中学部

中学部の3年間は子どもたちにとって、身長が伸び体重が増えるだけでなく第二次性徴が現れるなど身体の変化が著しい時期である。また、そうした変化に気づき自分自身を見つめるようになる時期でもある。このような子どもたちの実態を踏まえて、中学部では、自己決定する力や表現する力、友だちとかかわり合う力を育てるため、「こころを育てる教育」「生活をつくる教育」を進めてきた。その中で現行の教育課程のもとで実践されてきた「ハッピータイム」はダイナミックな活動を通して、学び合い育ち合う場として大きな成果をあげてきた。さらに「豊かな心と生活をめざして」のテーマのもと研究実践されてきた「散歩学習」や「フリーデイ」はこれまで育んできた力を自分自身で発揮し合う場となって、子どもたち同士がつながり合い協力しあう姿も多く見られるようになった。今年度は、中学部の目標についても再検討し、より生徒の実態に合わせたねらいを定め、そこから6つの柱を設定した。同時に、これまでの実践の意義やねらいを再確認するとともに、中学部の教育課程の大枠を作成することにした。

③ 高等部の研究

高等部では、教育課程の再編にあたって、その視点をできるだけ生徒に寄り添ったものにしたと考えた。本校の研究テーマでもある「豊かな生活」とはどのようなものなのか、現在の生徒の実態、卒業生の生活の様子、社会に出たときこうあってほしいという姿についての話し合いに多くの時間を費やした。その中で生徒の生活の重要な要素としての「学ぶ」「働く」「遊ぶ」に着目し、実際の学習活動もその3つのカテゴリーに分類して捉えることとした。

その中で今年度は、作業学習を中心に「働く」について研究を進めた。ここ数年で障害者観ひいては障害児の教育観も大きく変わり、人間に内在する本源的な「自発性」「主体性」を尊重する方向に動いている。作業学習についても「将来の職業生活に備えて、今生徒を指導していく」といった視点からの転換を図る時期にきていると考えた。

そこで、私たちは「働く」の第一の意義を「有用性」において実践を進めることにした。作業学習と自分たちの生活を担う活動の二つを、学校における「働く」と捉えて、人の役に立つことを喜べたり、働くことを通して人の中で自分の価値を再確認したり、自分の作った物が売れたり、他の人に喜んでもらえたりする経験を大切にしてきた。その実践をもとに、「働く」について、何をねらいとして、どんな内容で取り組み、どのような喜びや有用性を伝えられるかの項目でまとめた。

7. 教育課程編成上の留意点

(1) 地域の特色を活かして

本校は兼六園の近くにあり美術館、病院、博物館、金沢城、保育園、小・中学校など多くの文化的・教育的施設のほか商店、銀行、郵便局なども近い。また、市の中心に位置し

ながら坂道や緑も多く交通の便にも恵まれている。この地域環境資源を活かして、公共施設の利用、商店・銀行の利用、坂道を活用しての運動などを積極的に教育活動の中に取り入れていきたい。

(2) 障害の多様性を考慮して

毎年、肢体に軽度のマヒのある子、自閉的傾向のある子、多動の子など様々な子らが入学してくる。こうした障害を見つめその子にあわせた教育をどのように進めていけばよいのかいつも考えさせられる。特に重度といわれる子らの教育課程は特別な配慮が必要となり、そうした子らの教育観、指導観について明確に教師全員が共通理解しておくべきである。病気を併せ持った子らについては本校では経験豊富な養護教諭や、障害児教育を理解し常に協力を得ることのできる担当医に恵まれている。毎週小児・精神科の健康相談を実施するなどこうした医療的な分野での支えは非常に心強い。また、高等部では、様々な生徒の進路指導にあたって、ハローワークや市の障害福祉課に大変お世話になっている。このように、教育課程編成にあたっては関係機関との連携を図っていくことも大切であると考えている。

(3) 親との連携

本校では育友会活動が盛んである。年間計画を作成し、企画・教養・広報・庶務の委員会と父親部会が子ども達の「豊かな心と生活」を支えてくれている。表現会では母親、父親とも出し物を担当し、毎年趣向を凝らしたダンスや劇を披露して観客に大好評である。

学校からは、行事やその他の取り組みを保護者に伝えるため「週報」を発行し、各学部では学級の子どもの様子を伝えるため、連絡帳を活用している。この連絡帳を通じて、学校で出来たこと頑張ったことなど家庭に知らせたり、学級の指導方針を知らせたりして親の理解を得ると共に、家庭からもいろいろな相談事などを書いてもらっている。また、連絡帳だけでなく小・中学部のクラスでは、毎日「学級通信」を出し子どもたちの授業中の様子を伝えている。年度初めの懇談会では子ども一人一人の目標を保護者と一緒に決めて取り組んでいるクラスもある。さらに、各学部においてもそれぞれの実態に応じた取り組みがされている。小学部では「1日参観」を実施している。これは、1年生や卒業間近の6年生の親に1日先生になってもらって、自分の子どもの様子や他の子との関わりの様子を見てもらうものである。これにより授業参観だけではわかりにくい給食や休み時間などの様子も見ることができ、お母さん方は子どもの楽しそうな様子に安心したり先生の子どもへの話しかけ方などが勉強になったと感心されるのである。中学部では「親と語る会」を毎学期に行っている。1年生は中学部の生活について、2年生は自発的な活動への取り組みについて、3年生は高等部へ進むにあたっての心構えについてというふうに、毎回テーマをもって話し合われている。高等部では、現場実習のことについてや卒業に向けて考えなければならないことなど社会との接点に関する説明会や実際の就労に向けての個別の懇談も随時実施している。こうした家庭と学校の相互の緊密な連携が学校環境や子どもたちの雰囲気までさらに豊かにしてくれる。そして親と教師が信頼し合い協力し合うことで、行事その他の運営が円滑に進められるだけでなく、さらなる子ども達の成長発達をうなが

してくれるものと思う。今後、一層学校と家庭が一体となって、児童生徒の指導にあたっていけるよう、様々な方策を工夫していきたい。

(4) 情報教育の推進

現在の社会変化は、非常にめまぐるしく、機会化・情報化の時代が到来している。特にコンピュータやワープロなどの普及は広く深く、一般家庭にも浸透してきており、これらの機器を自由に操作したり、正しく必要な情報を選択できる能力が、これからますます必要になってくると思われる。また、海外旅行に行ったり外国人とのかかわりや諸外国との結びつきも日常的になり、国際化も進展してきている。インターネットで瞬時に諸外国とやりとりできる時代である。本校においても、コンピュータの簡単な操作に慣れたり、他校とのメールのやりとりを行うなどの情報教育にも積極的に取り組んでいきたい。

(河合利秋 新保利久 北川伸二 下野令子)

参考文献・引用文献

1. 「自己意識の心理学」 梶田叡一 東京大学出版会
2. 「子どもの自己概念と教育」 梶田叡一 東京大学出版会
3. 「7つの習慣」 スティーブン・R・コヴィー キングベアー出版
4. 「自己実現の心理」 上田吉一 誠信書房
5. 「子どもと社会力」 門脇厚司 岩浪新書
6. 「教育課程」 金沢大学教育学部附属養護学校 (1988.2)
7. 「創立30周年記念誌」 金沢大学教育学部附属養護学校 (1994.3)
8. 「豊かな心と生活をめざして」 金沢大学教育学部附属養護学校 (1997.2)
9. 「豊かな心と生活をめざして～教育課程再編に向けた実践研究～」
金沢大学教育学部附属養護学校 (1999.2)